

>> Dialogue between Sociology and 'Visuals' <<

第2回 “「東京」を観る、「東京」を読む。”展

— 建築の表現力と社会学の想像力 —

A. “東京駅と丸の内 —過去・現在・未来を彩る建築と都市景観—”展 by 建築ジャーナル

B. “写真で語る:「東京」の社会学 '06”展 (13回目) by “東京人”観察学会 (社会学科・後藤ゼミ)

06年11月21日(火)～30日(木) 土・日・祝日を含め、毎日12:30～19:00

建築と社会学の

コードとインターフェイス

会場：日本大学文理学部百周年記念館

主催：日本大学文理学部 共催：建築ジャーナル

後援：日本都市社会学会／関東都市学会／(社)日本建築家協会／(財)東日本鉄道文化財団
大手町・丸の内・有楽町地区再開発計画推進協議会／大丸有エリアマネジメント協会
世田谷区教育委員会／調布市教育委員会／府中市教育委員会
下高井戸商店街振興組合／桜上水商店会

第2回 “「東京」を観る、「東京」を読む。”展

ー 建築の表現力と社会学の想像力 ー

<昨年度の来場者投票第1位作品(309票)> 靖と白百合ー靖国神社の天皇性ー



⑤「東京人」観察学会（日本大学文理学部社会学科・後藤ゼミ）

靖国神社の参道をカトリック系の白百合学園の児童が下校している。

靖国神社は、1869(明治2)年、官(=天皇)軍戦死者慰霊のために創建された東京招魂社を前身とする。祭神は、国家=天皇のために命を捧げた約250万の「英霊」である。敗戦後は国家神道から脱して一宗教法人となったが、現在でも神門の扉には天皇家の紋章である「菊の御紋」が金色に輝いている。靖国神社が「天皇の神社」であり続けることの証である。

他方、フランス人修道女によって1884(明治17)年に創立された白百合学園が、神社の隣に移転してきたのは1927(昭和2)年であった。日本におけるキリスト教は軍国主義全盛の当時、靖国信仰(=天皇教)を「国家の祭祀」と合理化することで生き延びた。キリスト教で無垢の象徴である白百合を菊(=天皇)色に染め上げたのである。

戦後、国家や天皇や戦争責任や憲法や宗教やアジア諸国との関係のあり方が繰り返し問われる中、神社の支柱であるはずの天皇自身はかれこれ30年も参拝していない…。

2006年6月28日(日)15時頃

靖国神社(千代田区九段北3丁目)にて撮影

異質な視点と方法による2つの展示会を同一会場内でジョイントさせ、モチーフとする「東京」と「東京人」をビジュアルかつ立体的に描き出し、異種交配による<化学反応>を引き起こして、新しい“「東京」の読み方”を提示する。

第2回展は、建築と社会学とのコラボレーション！



⑥ 柿沼 隆 ((社)日本写真家協会会員)

← 昨年の会場風景

シンポジウム

“東京／日本らしさの<<核心>>を照射する ー東京駅と丸の内と皇居とー”

11月26日(日) 13:30~17:00 日本大学文理学部百周年記念館2Fの国際会議場(300席)にて

過去から現在、そして未来へと続く時間の流れの中で、東京／日本の心臓部(The heart of Tokyo)にあたる都市空間は、いかなる意思(計画)に基づいていかなる建築を生み出し、都市の景観・歴史・文化・社会構造を構築してきたのか／していくのか。東京駅丸の内駅舎の保存・復元プロジェクトがスタートしたのを機に、東京駅と丸の内と皇居に再度フォーカスをあて、「丸の内／東京／日本社会のらしさの核心」をあぶり出す。それは、皇一政一經の三位一体的構造の中で生まれ、培われた建築・景観・都市・文化のあり方とその特質を浮き彫りにし、掘り下げ、展望することを意味する。

今回は従って、丸の内の歴史的建造物や景観保存をめぐる是非や価値判断を論ずるのではなく、そうした議論の背後に透けて見える<対象としての丸の内>が有するユニークネスやその構造的的特質を明らかにすることこそが焦点となる。一体、丸の内のユニークネスや構造的的特質は、どのような歴史的・政治的・社会的背景や力学のもとに生み出され、それが建築や都市景観にどのように反映され、また近年における丸の内再開発(都心再構築／都市再生政策)の流れの中でどのように変容・変質し、そして今後どのように展開していくことになるのだろうか。この点を、東京駅・丸の内・皇居(天皇制)と様々な意味で深い関わりを持つシンポジストと共に、フロアをも交えて探求する。

- シンポジスト：
- (1) 岩井光男 (編三菱地所設計副社長)
 - (2) 伊藤裕慶 (大手町・丸の内・有楽町地区まちづくり懇談会副座長)
 - (3) 多見貞子 (赤レンガの東京駅を愛する市民の会事務局)
 - (4) 西村幸夫 (東京大学大学院工学系研究科教授／都市デザイン・都市工学)
 - (5) 古川隆久 (日本大学文理学部教授／日本近現代史)
 - (6) 松橋達矢 (日本大学大学院博士課程／都市社会学・丸の内の歴史社会学)

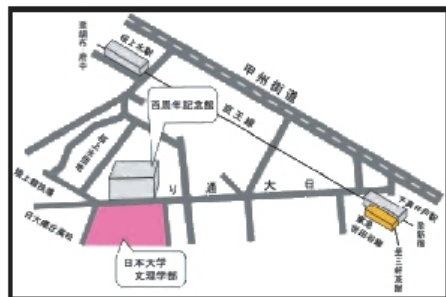
コーディネーター：後藤範章(日本大学文理学部教授／都市社会学)

会場：日本大学文理学部百周年記念館

交通アクセス：京王線下高井戸駅又は桜上水駅(共に新宿駅より10分)下車徒歩8分
東急世田谷線下高井戸駅下車徒歩8分

URL：http://www.chs.nihon-u.ac.jp/soc_dpt/ngotoh/tokyo/

問い合わせ先：ngotoh@chs.nihon-u.ac.jp



>> Dialogue between Sociology and 'Visuals' <<

第2回 “「東京」を観る、「東京」を読む。” 展

－ 建築の表現力と社会学の想像力 －



'06年 11月21日(火)～11月30日(木) 12:30 - 19:00
日本大学文理学部百周年記念館

A. “東京駅と丸の内 - 過去・現在・未来を彩る建築と都市景観 -” 展

by 建築ジャーナル <http://www.kj-web.or.jp/>

B. “写真で語る:「東京」の社会学 '06” 展 (13 回目)

by 「東京人」観察学会 (日本大学文理学部社会学科・後藤ゼミ)

http://www.chs.nihon-u.ac.jp/soc_dpt/ngotoh/tokyo/

主 催: 日本大学文理学部

共 催: 建築ジャーナル

後 援: 日本都市社会学会／関東都市学会／(社)日本建築家協会／(財)東日本鉄道文化財団

大手町・丸の内・有楽町地区再開発計画推進協議会／大丸有エリアマネジメント協会

世田谷区教育委員会／調布市教育委員会／府中市教育委員会

下高井戸商店街振興組合／桜上水商店会

シンポジウム

東京 / 日本らしさの << 核心 >> を照射する - 東京駅と丸の内と皇居と -

11月26日(日) 13:30 - 17:00

日本大学文理学部百周年記念館 2F の国際会議場 (300 席) にて

シンポジスト: (1) 岩井光男 (株式会社三井物産設計副社長)

(2) 伊藤裕慶 (大手町・丸の内・有楽町地区まちづくり懇談会副座長)

(3) 多見貞子 (赤レンガの東京駅を愛する市民の会事務局)

(4) 西村幸夫 (東京大学大学院工学系研究科教授／都市デザイン・都市工学)

(5) 古川隆久 (日本大学文理学部教授／日本近現代史)

(6) 松橋達矢 (日本大学大学院博士課程／都市社会学・丸の内の歴史社会学)

コーディネーター: 後藤範章 (日本大学文理学部教授／都市社会学)

<< 全 て 無 料 ・ シ ン ポ ジ ウ ム は 先 着 順 >>

京王線下高井戸駅又は桜上水駅 (共に新宿駅より 10 分) 下車徒歩 8 分